

器樂的幻覺

梶井基次郎

ある秋フランス仏蘭西から来た年若い洋琴家ピアノストがその国の伝統

的な技巧で豊富な数の楽曲を冬にかけて演奏して行ったことがあった。そのなかには独逸ドイツの古典的な曲目もあつたが、これまで噂ばかりで稀にしか聴けなかつた多くの仏蘭西系統の作品が齎もたらされていた。私が聴いたのは何週間にもわたる六回の連続音楽会であつたが、それはホテルのホールが会場だったので聴衆も少なく、そのため静かなこんもりした感じのなかで聴くことができた。回数を積むにつれて私は会場にも、周囲の聴衆の頭や横顔の恰好にも慣れて、教室へ出るような親しさを感じた。そしてそのような制度の音楽会を好も

しく思った。

その終わりに近いあるアーベントのことだった。その日はいつもにない落ちつきと頭の澄明を自覚しながら会場へはいった。そして第一部の長いソナタを一小節も聴き落すまいとしながら聴き続けていった。それが終わったとき、私は自分をそのソナタの全感情のなかに没入させることができたことを感じた。私はその夜床へはいつてからの不眠や、不眠のなかで今の幸福に倍する苦痛をうけなければならぬことを予感したが、その時私の陥っていた深い感動にはそれは何の響きも与えなかった。

休憩の時間が来たとき私は離れた席にいる友達に
目^{めくば}眇せをして人びとの肩の間を屋外に出た。その時間
私とその友達とは音楽に何の批評をするでもなく黙り
合つて煙草を吸うのだったが、いつの間にか私達の間
できまりになつてしまつた各々の孤独ということも、
その晩そのときにとつては非常に似つかわしかつた。
そうして黙つて気を鎮めていると私は自分を捕えてい
る強い感動が一種無感動に似た気持を伴つて来ている
ことを感じた。煙草を出す。口にくわえる。そして静
かにそれを吹かすのが、いかにも「何の変つたこと
もない」感じなのであつた。——燈火を赤く反映して

いる夜空も、そのなかにときどき写る青いスパークも。
……しかしどこからきこえて来た軽はずみな口笛が
いまのソナタに何回も繰り返されるモテイイフを吹い
ているのをきいたとき、私の心が鋭い嫌悪けんおにかわるの
を、私は見た。

休憩の時間を残しながら席に帰った私は、すいた会
場のなかに残っている女の人の顔などをぼんやり見た
りしながら、心がやつと少しずつ寛解して来たのを覚
えていた。しかしやがてベルが鳴り、人びとが席に
帰って、元のところへもとの頭が並んでしまうと、そ
れも私にはわからなくなってしまうのだった。私の頭

はなにか凍ったようで、はじまろうとしている次の曲
目をへんに重苦しく感じていた。こんどは主に近代や
現代の短い仏蘭西フランスの作品が次つぎに弾かれていった。

演奏者の白い十本の指があるときは泡を嚙かんで進ん
でゆく波頭のように、あるときは戯れ合っている家畜
のように鍵盤に挑みかかっていた。それがときどき演
奏者の意志からも鳴り響いている音楽からも遊離して
動いているように感じられた。そうかと思うと私の耳
は不意に音楽を離れて、息を凝らして聴き入っている
会場の空気に触れたりした。よくあることではじめは
気にならなかつたが、プログラムが終わりに近づいて

ゆくにつれてそれはだんだん顕著になって来た。明らかに今夜は変だと私は思った。私は疲れていたのだらうか？ そうではなかった。心は緊張し過ぎるほど緊張していた。一つの曲目が終わって皆が拍手をすると、私は癖で大抵の場合じつとしているのだったが、この夜はことに強^しいられたように凝然としていた。するとどよめきに沸き返りまたすーつと収まってゆく場内の推移が、なにか一つの長い音楽のなかで起ることのように私の心に写りはじめた。

読者は幼時こんな悪戯^{いたずら}をしたことはないか。それは人びとの喧噪^{けんそう}のなかに囲まれているとき、両方の耳に

指で栓せんをしてそれを開けたり閉じたりするのである。するとグワウツ——グワウツ——という喧噪の断続とともに人びとの顔がみな無意味に見えてゆく。人びとは誰もそんなことを知らず、またそんななかに陥っている自分に気がつかない。——ちようどそれに似た孤独感が遂に突然の烈しきで私を捕えた。それは演奏者の右手が高いピッチのピアニツシモに細かく触れているときだった。人びとは一斉に息を殺してその微妙な音に絶え入っていた。ふとその完全な窒息に眼覚めたとき、愕然がくぜんと私はしたのだ。

「なんとという不思議だろうこの石化は？　今なら、あ

の白い手がたとえあの上で殺人を演じても、誰一人叫び出そうとはしないだろう」

私は寸時まえの拍手とざわめきとをあたかも夢のように思い浮かべた。それは私の耳にも目にもまだはつきり残っていた。あんなにざわめいていた人びとが今のこの静けさ——私にはそれが不思議な不思議なことに思えた。そして人びとは誰一人それを疑おうともせずひたむきに音楽を追っている。言いようもないはかなさが私の胸に沁しみて来た。私は涯はてもない孤独を思い浮かべていた。音楽会——音楽会を包んでいる大きな都会——世界。……小曲は終わった。木枯こがらしのような音

が一しきり過ぎていった。そのあとはまたもとの静けさのなかで音楽が鳴り響いていった。もはやすべてが私には無意味だった。幾たびとなく人びとがわつわつとなつてはまたすーつとなつていったことが何を意味していたのか夢のようだった。

最後の拍手とともに人びとが外套がいでうと帽子を持って席を立ちはじめるときの終わりを、私は病気のような寂寥感せきりようかんで人びとの肩に伍ごして出口の方へ動いて行った。出口の近くで太い首を持った背広服の肩が私の前へ立った。私はそれが音楽好きで名高い侯爵だということをしぐ知った。そしてその服地の匂いが私の寂寥

を打ったとき、何事だろう、その威厳に充ちた姿はたちまち萎縮いしゆくしてあえなくその場に仆たおれてしまった。私は私の意志からでない同様の犯行を何人もの心に加えることに言いようもない憂鬱を感じながら、玄関に私を待つていた友達と一緒にいるために急いだ。その夜私は私達がそれからいつも歩いて出ることにしていた銀座へは行かないで一人家へ歩いて帰った。私の予感していた不眠症が幾晩も私を苦しめたことは言うまでもない。

底本：「檸檬・ある心の風景」 旺文社文庫、旺文社

1972（昭和47）年12月10日初版発行

1974（昭和49）年第4刷発行

入力：j.utiyama

校正：福地博文

1998年11月27日公開

2005年10月3日修正

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。